

門ホ 2
流 4706
巻 2

語彙卷二

阿部二

あさ ○あした

あさ

はれども 實あさ、雌の花をくく、實を結ぶ、
和麻 和名平一 万九 とうきつりの麻を引干

あさ

あざ

あざあけ ○あざけ

あざあけ

深緑松ゆもあざぬ浅あけの
衣きぬぞしづとあけん

夜の明しより真晝中入二時

そりのわをとりふ○朝

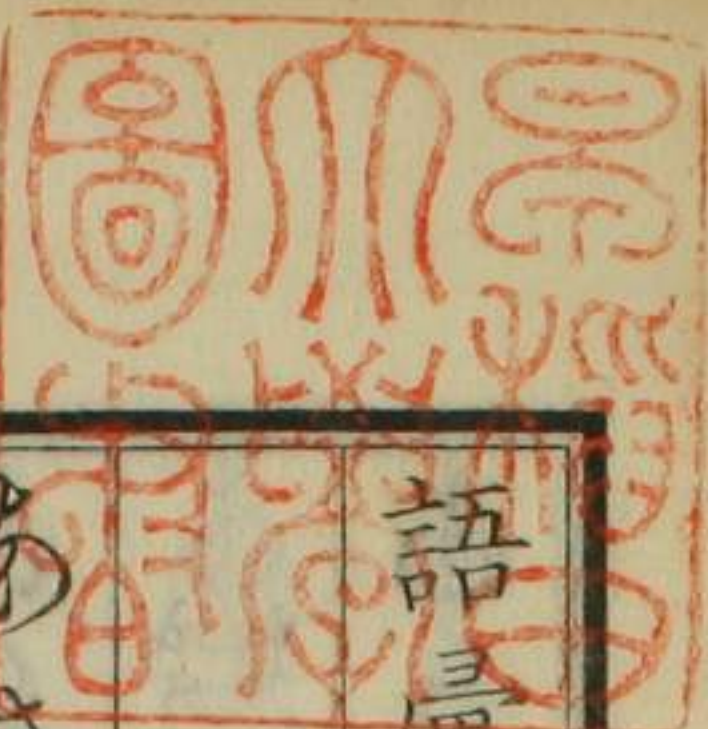
方莖直上七八尺、葉對生、葉形槭の如く、ゆく長大なり、雌雄あり、雄の花を生

布名あさぬの下注也 天和下 霜雪のふるやが

病ふよりて皮膚の異なる色也

朝明かり 續吉 春上 朝あけの霞の衣

細の浅きちり 縫殿式 浅緋綾一疋、菑大 卅斤、米五斤、灰二石、薪三百六十斤、順集



あさぐけ

あさぐけの下小注を御湯殿記天正十四年 廿日

あさぐけ

あさぐけハツキリシタルを云わたり源御法句ひ

此世の花のうをりゆもよそへれ給ひを平家三そとの姿の有たるを何とぞく是をせうてとぞれ沖の小島ふれ有とかきあせ言のちあり文字をいあり入もささつけれたりとれ浪ぬもあさぐけとせえたりとれ

あさあめ

朝の雨なり記上阿佐阿米能佐疑理途多牟牟叙

あさあじ

朝つとく吹あらし山風をりふ朝嵐

あさあね

あね色のうをり縫殿式浅藍色綾一疋藍半圍黄蘗八兩

あさいあさね

朝久く寐過を事して朝起の及わり方十やらぎはけの朝げふ鳴つるい

まろく朝宿るぬらん新六一またれつ老ぬる身よの朝いせれ

あさうら

麻を細くより合せたる絲をり順集棚機あさうらつる麻糸をより入のあさうら

あさうり

草名あけびの下小注を以字通草アサウツ

あさうり俗

瓜類あさうりの下小注を

あさうり俗

瓜類あさうりの下小注を

あさあさ俗

朝早く起出るあさあさ

あさがい因幡俗

木名やぶゆけの下の小注を

あさかげ

朝日小映る人影のやせてとやうを人のやせたるゆを方十朝影ゆを身をありぬ

玉蜻のわのう小見えて往一思ゆあふ

あさかほ

朝たつかほあり方七朝霞やゆたなびくたつ山船出せん日れこひんるも

あさかほ枕詞

方十あさかほを畧さてうの一言ふひうけり

かをるの曇るあさ

あさ

あさ

あさかせ

あさかせ

注 あさうぜん草の
異名あり

あさかぢ

あさかは

あさかひ 俗

あざかへま 加刈刈也

義をさきまへて家長日記はすべて二千首をよぶるを
そとへて御らんへてあざかへまをせ給ふといふ

あさがほ

けさの朝顔○此歌の草花の
あさがほうけてよめるあり

朝ふく風あり 万二宇治間山朝風さむい旅
ゆくと衣うまへき妹もあふかく小

朝の姿を云 頼政集上らねぬくて人ぬる野への
女郎花今さの花のあさうぢちみん

朝の川を云 方三人事をあげてこちたを
おのも垂れいさる渡りぬ朝川こころ

螺の類ゆ 薄く色
淡紫あるものあり

あざかへま あざかへまのあざかへまのあざかへまを念をいして
たびくはるをいふ古徳傳文をあざかへま

女の福あまの朝のうらをいふ 源々顔さう
花ふうつるてふ名つめどもとてはさうさ

蔓生葉三尖或五尖花形鼓子似て早晨
小開き日を見て萎む花色紅碧紫白種類

あさがほ

けさうぢ○あめあざ
かへまのあざかへま

數百品あり本和牽牛子和名阿
佐加保古今物名打つけくとや花の色をこん
やく白露のともむるをうら新古秋上山ぐりのかきり小生る朝顔のあめめ
あざかへま

あさがほ

むくげ○あざかへま

あさがほ 俗

薄くして四羽一處小重なる身狭細く淡黄色尾至て細く緑の如し
二條あざ雄三條あざ雌ゆと石蚕の羽化せる者なり○白露蟲

あさがほ 俗

和歌浦ゆ
産す

あさがほせんべい 俗

上開下窠牽牛花の形小
似たる煎餅をいふ

あさかき あさかき

あさがき あさがき

あさがき あさがき

いひみぢ

あさがら あさがら

あさがら あさがら

あさがり

あさがれひ

さうりふれさせ給ひて年中行事歌合何とたよその契のあさがれひも手もふれぬ人を戀らん

あさがれひ

朝起たる時髪あしの亂みだたるをあし朝あし髪あしの念あし亂あしてかあしくあしむあしりあし名あし妹あしがあし戀あしまあしぞあし夢あし見あしえあしけるあし麻布あしゆあしてあし造あしりあしたるあし上あし下あしとあしりあしふあし上下あしの下あし注あしせ

方ああさがらのあもひとだまさてあ寝て起る朝髪の亂てあるものあれがこだるこ

葉玉あ鈴花に似て小さう三四月白花開く紫藤の如く下垂と白辛樹

大麻の皮を剥たるあの摺をいふ

朝早く鳥獸を獲ぬ出立つわり万朝獵今たくまる一

天皇小奉る朝の供御をいふもとられる朝の食事のことわり源摺あさがれひのけき

清涼殿の内にあり天子朝餉を聞くめき所をり朝餉の間の略言あり禁秘御抄朝餉

二間南平敷二枚北東北立屏風絹屏

夜御殿方有障子

あさこい あさこい

古今意五山の井のあさこいころもあわるもあわるよかけをうりのと人のことわり源葉つくさもあされるも浅うぬ世の思ひをさまめくめづくあるまさため

あさこい

安草三斤八両灰一斗
二外薪卅斤

あさこい あさこい

あさこい

あさこい あさこい

あさこい あさこい

あさこい あさこい

あさぎら

朝ふく北風をりあり五佐かぢとりあり
あさぎらんのりぬささぬ手さやひけとりふこのことさの
歌のやうあついかぢとりのあつゝのこさあり

あさぎら俗

葉の大ききりあまの如く花の棉花の如く
めて小い色あさぎらあり

あさぎらぬ

あさぎらもの下注催馬樂かたらあふ
物いふささかかす安左支奴もこらめの
こくく袂よく着よくかたよくこらび
あさぎらぬひさせありも

あさぎらのりぬ

悪木の藓木はていろいりあり寶治百首さう
うぬあさぎらのりぬささきさげささるこれ

あさぎらのりぬ

あさぎらのりぬ

悪木の柱あり千載あづまのあさぎらの
ささらされあづまのりぬあれて戀ささるん

あさぎらよめ

朝の庭を掃き清むるをりぬ拾遺雅春よ
もりのとものさやつこ心あさぎらの春さうり

朝さぎらよめ

あさぎら

朝の霧をりぬ万十朝霧之棚引小野のささ
の花のさや散らんりぬあさぎらあさぎら

あさぎらのりぬ俗

茵蔯の如くささ細小白草
殊多きものあり

あさぎらのりぬ枕詞

万十三あさぎらのあもひやとひて朝の
空に霧たてのもの見まどらる故あもひ

あさぎらのりぬ

あさぎら

草の浅くおひたささといふ夫六ある川の岸の
あさぎらのあさぎらささる浪よるやりの夕風

あさぎらのりぬ俗

水菜あまのりの一名中古武藏浅草川の
産を賞せりより此名あり

あさぎらぬ

あさぎらぬ小同呉竹集猫をいふあり
さよ更にあさぎらぬ小逢ぬささるあさぎら

あさぎらぬ

あさぎらぬ

梔子うすく染たる色なり縫殿式浅
支子綾一足支子二斤紅花小三両酢一合

葉半圍
薪卅斤

あさごつ

人皆敷用織物不然之
人用平絹

平常装束着用の時用ぬる沓わたり雨雪
かとしゆい深沓を用ぬる飾抄中淺沓禁色之

あさごつぬ

あさごつも

猫の異名秘藏抄さよふけくあさごつもあふ
あひぬるくもえひまきらゆのううふれをわく
朝の雲をりく方三 玉雲ふたぐい甜と
夕霧ふうとぐいささ

あさごつもり

あさごつもりせーあさごつもりせーあさごつもりせー^{あさごつもりせー}
とや鳴朝ごもりりちり行雪のそめのわさごつりふ
鳥小ありぬてわげさつるも源御筆うちまきじ
朝陰るをりく方三 玉雲ふたぐい甜と
夕霧ふうとぐいささ

あさごつり

あさごつせんせう

あさごつ

あさごつ

神樂の曲名わたり神樂譜星已了云云
可仕朝倉支催甚能之歌人須
木名あるそかきの下注ま原但馬の國
朝倉より産せーゆ名小此名あり
朝明あり早朝をりく方八 このころの朝開ふ
さけいあひまきの山をいささるもささるもささるも
朝の食をりく方八雲下 飯くれりひ
あさごつあさごつ

あさごつ

一約紫草一斤
灰一外薪三斤

あさごつは酢を用ぬる灰を減して染め
光彩を減たる義あり縫殿式淺滅紫絲

あさごつのかぜ

あさごつのみぎり

あさごつけり

あさごつけり

あさごつ

あさごつ

あさごつ

字啗阿留靈異一些ケル唐物語今そとめて
人のこころあさごつをいささるもささるもささるも

あさごつ

あさごつ

あざけり 初川山

あざけり

あざけり

あざけり

あざけり 枕詞

あざけり ○あざけり

あざけり

五瓣黄色 ○苜蓿本和葛葵 和名阿六帖六見 池小生るあざけりの浮て世とへ

あざけり

あざけり 俗

朝あさ 朝よりつくる詞めて思ひをさす事たり
後拾序月あざけり風ゆるむ事たさ
朝船をこぎあざけり万あざけり聞はる
けりあざけり川朝あざけり野の萩散る
朝の東風あり あざけり野の萩散る
朝東風ふたぐひてこりちりね
朝の氷なり あざけり川あざけり野の萩散る
能宣集 あざけり氷あざけり速あざけり
麻布あざけり衣服あり喪服も用ゐる
万あざけり白妙の麻衣あざけり水底小生る莖細く葉水面小浮あざけり形あざけり蓴菜
の如く一方小缺あり夏月花を水面小抽づ
朝の寒きあざけり源野分 あざけり朝あざけり打あざけり
酒あざけり朝あざけり空あざけり酒あざけり

あざけり 音

座講師僧正云々暮座講師前権僧正辨内侍日記りをげ

あざけり

山木あざけりを繁と朝あざけり去来あざけり

あざけり

あざけり

あざけり

關東記行の山雪あり道ありあざけり道ありあざけり氷ありあざけり申あざけり

あざけり

あざけり

朝あざけり露あざけり霧あざけり花あざけり朝あざけり霜あざけり夫あざけり野あざけり狩人あざけり

あさしもの (枕詞)

景行紀阿佐志毛能彌概能佐鳥廢志方十朝しものけふあけちまきく ○朝霜の消とつげ

あさしらげ (加賀俗) 尾張

草名そこべりの下小注也

あさしぞ

記中摩都理許斯美岐叙阿佐受袁勢佐々

朝の間のまき

あさしやま

夏の炎熱のころ朝起して涼む頃をいふ

あさしやま

源集朝よまごのやどふ出たゆひとれど

あさしやま

一疋蘓芳小五両酢一合灰八外薪六十斤

あさしや

海河の浅き所をいふ古今秋上天川あさせ白浪

あさだけ (俗)

たどりつゝさたりとて裾をあけぢふら土菌、まの箱のかうらさの黄色いて莖微し白きものなり ○地芥

あさだち

朝早く家を發て行なり 万カむら鳥の安佐

あさぢり

太知りま君かういさるふさうの思ひごとく

魚名和鰕知阿散大口細鱗有斑文者也 ○今時

あさぢり (筑紫俗)

あさぢりと称するあひらの一名として形状本

あさぢり

文と異なり未ご其實を詳よせむもこの類とせる説あねども海産

あさぢりあめ (俗)

あして淡水小産せされ的確の實といふへうを暫其語を擧て後考を俟つ

あさぢりさけ (俗)

魚名あひらの下小注也

あさぢりはら (枕詞)

浅く生れる茅をいふ 万十 あねさればあく白

あさぢりはら

露あまかしの浅茅さうは色つきふら

あさぢりはら

銘の名其製あさぢりもち

あさぢりはら

肥後にて製造する酒めて

あさぢりはら

茅の浅く生れる所なり 頭宗紀 倭者彼々

あさぢりはら

茅原浅茅原弟日僕是也

あさぢりはら

万三 浅茅はうつさうく ○浅茅の花を

あさむらのあは

瀬のあはむらへ

あさむらのひびくあは

神もこころごとく

あさつた

賦役令 島嶽一石一斗
主計式上 島嶽

あさつた 播磨俗

あさつたあまませ 俗

あさづくひ

あさづくひ 枕詞

茅ゆてあひひる縄にて枝の具あり夫九思ふ
ここのあさむらのあまませもつつけくまよた河

上小同ト左纏小るへるあうり夫九
まろろああさむらのひびくあはをあうぶる

葱類ゆて葉極て細く浅緑色晩春を過まは
葉硬くく食ふ不堪とせ○麥葱和島嶽河

木名あたぐもの
下小注せ

麥葱蛤仔肉と未嘗ゆて
和一たるものをいふ

あさひの下小
注せ

方七朝形日向山又土朝形日向山○月
借字ゆて朝形日向山朝のうまよる日と

あさづくよ
りふ朝日のうけりこあえ向ひ来るものあれ向とつけれり又十一巻ある
櫛の匣を開て朝小先むくひとるものあまむかづけれるあう

あさづくよ

あさづくけ 〇あさく

あさづくて 俗

あさづくあは

あさづくあはむらへ

あさづく

あさづくの 枕詞

あさづくあはむらへ又露の

あさづく 〇あさく

朝中を残りたる月夜也方九朝形
夜あけよくとせ

蘿蔔の塩漬かり麴を加へ或ハ糠とらそへ
たるものあり大上膳名事あさづくあさく

あさく
同ト

近江國坂田郡朝妻とりの地の渡船をりふ
山家下あさづくあはむらへの風さた小

朝あけ露をりふ方九朝露あはむらへる花を
とるこころ思ひんやうせこひりまけりも

万五あさづくのけやせたりと身古今哀あさ
づのあさづくの山田○あさ露の消やせたりもの

明後日わうり源器あさくたをうりあわうりて
又東屋あさくたをうり思へん心あさくたをうり

あさひこひさま

こせ杯あさひ
こせ杯あさひ

あさひこひさまの下注は万十四
安佐提古夫須麻こひだふつこひ

あさひと

朝起出て開る戸をいふ万八朝扉あけて物
思ふとたは白露路のあけり秋をき見えつこもとを

あさひと

朝ノネドコカケり万九朝床あきけりあさひ
射水河あさひとだつこひたふあさひ人

あさひと

朝戸を開て出るをいふ万十朝戸出の君
よそひとつくまき長き春日とこひやううん
木名あさひとつもの
下注は

あさひと

備前俗
播磨

万三あさひとつものかよひ一君が○朝の鳥の
羽らつをりて食をもとめ行通ふもの

あさひとりの枕詞

かづねの人の行通ふを
たつとつ

あさひと

あさ食ふ菜蔬をいふ万六のぎとつもの
香椎乃瀬小白妙の袖さふふもて朝菜摘らん

万十四このかまふ安佐奈あさひと思ふれも
あれもよちせもぞもてさひで子たをりわ

あさひと

實名の外小名あるをり今今の世の通称の
ごご一仁賢紀諱大脚字島郎靈異下文忌

寸云云字曰
上田三郎

あさひと

毎朝ありもとのあさひとつものあさひと
朝の食物をいふ万七を轉して只朝の

事ふりくり万十一人の親のまめこまめ

まめも吉今春上野へちちく家ゆ

あさひと

上総俗

大さかけまの如く青毛冠あり脚嘴紅尾
短く好て朝鳴く其聲高く亮あるものあり

○羽譜宜胤按上総土人曰國有称阿佐奈木鳥云疑鶺鴒

是乎中古鶺鴒嘲あてたる此鳥あさひ

あさひと

万四朝名す水手のこととつひあさひとつもの
あさひとつもの朝海上のあさひとつもの

握のこつ万六朝名す水手のこととつひあさひとつもの

あさひと

あさひとつもの朝あけ小さき君とつもの思ひ

あさひと

あさひとつもの朝あけ小さき君とつもの思ひ

わちぬる草まらうとつ

けしき山への思ひやうとつ

貫之集朝あけ小さき君とつもの思ひ

あざふねる ラリルレ

あざはる 同○糾

あざふねる ラリルレ

あざふねる 類名 摺り

あざふねる ハヒフ

あざはる 同○糾

あざふねる ラリルレ

あざふねる 塵添 搥囊抄五

あざふねる ○あざふ

あざふねる 朝菜ヲ菜ハカククと云ふあざふの

あざふねる 朝魚ヲ菜ハカククと云ふあざふの

あざふねる

あざふねる 朝の庭をり方七

あざふねる ○あざふね

あざふねる 朝小来經ゆて日々ゆていふ意あり方三青

あざふねる

あざふねる ○あざ

あざふねる 麻織りて織る布をり方三和紵布

あざふねる

あざふねる あざふの下の注を夫十九

あざふねる

あざふねる あざふの下の注を方十

あざふねる

あざふねる 麻布の羽織をり方

あざふねる

あざふねる 麻布の衣なり方

あざふねる ささふも月お

あざふねる

あざふねる 抜小用ある麻の枝かり

あざふねる 俗

あざふねる 佛家小毎日二六時中勤行する

あざふねる

あざふねる 河原小麻の葉のぬき取

あざふねる 俗

あざふねる 大さ常の龜の如く麻の葉の文あるもの

あざふねる

あざふねる 瑠璃の類呖哇小産

あさひのこ

あさひのよめ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

苴麻の實をいふ薬用又食用とす

本和麻黄 和名三

麻の幣めて枝の具なり とて發語夫五玉の

魚名、ひくめの小あさ

物事、浅々しく心深く ぬいどりのみさうら

形状をいふ辞あり 源空輝 あさひのこゆい

麻布を織る機あり 新六五 あさひのこ織てふ

布のぬきとあつとよらの嵐もえやいふせうん

はあさひのうまいた色あり 縫殿式 淺縹綾

一疋藍一圍、新井斤

篠目抄 子規の

異名

あさげのあさ

朝飯あり

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひのこ

あさひあざいも俗

家山薬をゆぐ皮と去りて紅を染たるものあり

あさひの枕詞

記上阿佐比能惠美佐迦延岐豆○あさひの

七まを人の笑ささうめふ
壁へてつげたり

あさひまんぢう俗

綿臙脂を以て紅色に染たる饅頭あり

あさひもち俗

水織めて暮着の粉の紅餡を畏たるものあり

あさびらた

夜あけて船の湊を出るを朝びらたはらとり入り万三上のものをあつたるとむ且開

あさひ俗

あさひのうらむ安佐比良伎一と

あさひ俗

あさひの轉せるめてりる詞あり經信御母集

あさびと瀬あさひるむ○あさひの活用たさあひ定めがたけむとあさひる波行四段とさだめてのあひ考をせり

あさひ俗

麻布よく作るあさひありあさひ

あさひ俗

浅きをりふ又浅慮をりあさひ源御法

あさひ俗

あさひ交あるをりふ神代紀上夫品物

あさひ俗

あさひ手と又足をらむをりあさひ發心集

あさひ俗

あさひ手と又足をらむをりあさひ粉川寺縁起遠近の

あさひ俗

あさひあけのけきをりふ古今多あさひけ有

あさひ俗

あさひ浅中しかり又浅慮なる状をりふ万四これ

あさひ俗

あさひ物のが小過て思ひの外あるをりあさひ驚馬あり

あさひ俗

あさひ

タイサウデアルの意ゆゑのりり拾遺書を鹿のつめつめひしぬ山川のあまつし
ちてぬる袖うぢ源景御をもち来てぬ女房あまつしきふわさるる
いで来ぬ又負めのこつとちの思ふべた人
あまつし

あまつし

寒ければるまぢのゆき
きぬ人ぞあつた

あまつし

あまつし

猶あまつしつとあつたを給ひぬべりあり夫九ささるるの
朝つとつと繁けれと代々ふとせぬ敷島の道

あまつし

あまつし

草名、龍騰の一種、葉廣く
花小斑かたものちり
氷の浅き處をいふ伊あまつしを袖ひつとめ
涙川身さかえりてささるるのちん

あまつし

春花を開く、人家庭間ふらふ者、紅白紫黄種々の花あり和蘭御名阿
記中阿邪美能伊理毘賣命垂仁紀前瓊入媛等御名小假用あり

あまつし

あまつし

北國のそむくだふある西國さるるあまつし

あまつし

あまつし

あまつし

あまつし

あまつし

宇拾八さそ飛ぬ
あまつし見のりあまつし
朝見草は残花秋の曙
桑の葉の花又深き
ものちり○雜桑
朝見草は残花秋の曙
潮は身をたれとこひはせれ草つとを歸らん
縫殿式淺緑綾
一足藍半圍黄縷二斤八両

あぢうたものゝあぢり
ヲリル

車、かうのめ
う〜せ

あぢうたものゝあぢり
又、さごと其事世小聞えて

殿、さ〜もあぢり
ちめ給ひけり

あぢうたものゝあぢり
マシム

あぢうたものゝあぢり
マシム

あぢうたものゝあぢり
ろたあぢり事際りあ
人ふこそありけねとらひあぢり
あぢり水の鏡下
あぢり時の人をむとあぢりなりけむ幸ひ
あぢり言をり

あぢうたものゝあぢり
テツツル

秋の来さう〜あぢり
あぢり身

あぢうたものゝあぢり
ハロフ

あぢうたものゝあぢり
加キケケ

あぢうたものゝあぢり
セリスル

あぢうたものゝあぢり
セリスル

あぢうたものゝあぢり
セリスル

万五、ぬきあけてはれぬ〜阿射無加受た〜あぢり
源、手習さ〜あぢりもの〜あぢり侍らぬ
後撰、意入あぢりあぢりあぢり有明の
月、ふさ〜あぢりあぢり

あぢうたものゝあぢり
加キケケ

あぢうたものゝあぢり
セリスル

あぢうたものゝあぢり
セリスル

あざむかろ

ルルル

他ハワルクイハルを

沙石集下神明もいづる罰一給ふべきことあつたあざむかたり發心集法師
を見もどくも貴む人ありきへはむむ人あれ返てこそをあざむく

あざむり

催馬樂律の曲名浅水安左牟川の
せいのこころ

あざむらた

むらたのうまは色なり縫殿式浅紫、
紫草五斤、酢二升、灰五斗、薪六十斤

あざんまん音

詩作のりふ詞なり平字ゆくも仄字ゆくも
三字づゝ句の下連ありうをりふ○下三連

あざめ俗

あざげの下ゆ
注せ

あざめのき備前俗

木名、稀ぢのきの
下注せ

あざめよ

朝起て先づ見る物の宜しさをりふあり
記中降此乃状者穿高倉下之倉頂自其墮

入故阿佐米余玖海取持
獻天神御子

あざも枕詞

万二朝毛吉木人又三朝毛吉木上宮を又四
麻裳吉木道ハ○あざもハ麻裳めてよハ呼

わけたる言まハ助語ゆて麻裳
よ着とりふ意のつけあり

あざや近江俗

草名、まごがんびの
下注せ

あざや

キレイナ又ハツキリわより雄略紀朝野衣冠未得
鮮麗字鮮盛之良阿宇まを少將あがりの

よそひあざやうゆて源空輝
まご口つたあざやうづた

あざやカギグゲ

心のシヤントシタル衣服のシヤントシタルあざをりふ
ゆて強き意なり源幸習白きひと人のいと情

わろくあざやざれたるゆ又寢
あー又女まごーまごーあざやざれたる御こころあづめ

あざら

菜類、芥の下注せ
能因歌枕あざら芥を云

あざらつた

朝中を殘る月をいふ頼政集上天の原朝
行月のいづろく世あまもるこちをせれ

あざらり

浅きあり万十三あづ染のあざらりの衣
浅介あもひて妹小あそんものも

あざらけた

クシキ

あざやう清きうゆて腐さる状をいふ
仁徳紀鮮魚靈異鮮アガ以字鮮アガ

あざり

猪皮後鞞水豹皮腹纏
和水豹左和良之

海獸なり。脰胸獸小似て毛粗ゆして光り白質黒章あり皮を馬具等小用なり。新儀式

あざり俗。きうめぐひ

蛤の類。殼薄く細き。縦道ありて文采一ちうとせ。○蛤仔

あざり梵

軌軌と譯を僧徒の師匠とわするものなり。○阿闍梨十訓山うそのあざりとわする

あざりあづりわが深きうらもの
名をわ残さん

クヒモノヲモトナルクをりあやう精中川放ち馬どものあざりありらもとらう小見とんり

あざりありく加キクケ

あざりはるセシススレ

魚介わととるこをまををりあり方五阿佐里演流あやの子どもと人のへど見ら小

あざりぬうま人の
子と

あざりわらヲリルレ

さざりわら源霧此御ふらひは
くら給ひつせせめてもあざりどつせ
かこ侍らものりあな

あざりわらマミムム

もとめて食ふをり字鯛又阿佐利波牟又

あざりわらメムルレ

サガシモトメルをりあやう唐物語屠岸賈この
事をさうつけてあざりちあざりもとのけり
物をサグリモトメルを

あざりヲリルレ

りふ○索
他小物とサグリモトサセルを

あざりわらセシススレ

同上

あざりわらメムルレ

源霧せめてもあざりどつせ榮浦の別都のうらとをわらふ記非をとら

あざり紫式部日記上やをあやうまとあざりせ給ひて字嵯峨院野べとあざり給ひて

あざりヲリルレ

魚介わととるをりあやうてさざり
もとむる意よりりあやう○漁

あざりわらセシススレ

他と魚わらトラセルをりふ

あざりわらメムルレ

同上

源須磨りせ島やまわひのくまわさうりけり
いふうひわたりたれ我身なりけり

あさうら ラリルレ

鳥獸あさうらのクニモノヲモトメルをいふ○求食カセ
ゆゑあさうら小求食為鶴まわらしてバあはれやうと
たうとあのかつちうぶ又求食為といふ小まむたう
明あけはさうらせさむとあのかつちうぶ

あさうら ラリルレ

あさうら ルルルレ

あさうら ルルルレ

阿射里 アセリ 万五たう
肉のワルクナルをいふ仁徳紀海人之苞苴
鮫於往還類名鮫アサ
ザレ アサ といふ氣がら小戯る意なり源藤葉あや
やけさうらさうらたうらてあさうらさうら

あざれあふ ハヒフヘ

あざれあへ ラリルレ

あざれあひ カキクケ

ザレアヒテアル アヒ 玉佐まわ海の
わらうらあてあざれあへ
ザレアルク アルク といふわらう源多負つまわらあへ
わらあてあて思ひよへぬさうらあへ

あざれあひ ケ

あざれあへ ラリルレ

あざれあひ シシシキ

あざれあひ 今やうのい

あざれあひ マミムメ

あざれあひ 又葉あざれあひ

あざれあひ ハヒフヘ

あざれあひ 又葉あざれあひ

あ ハヒフヘ

あ ハヒフヘ

人の脛より下をいふ轉トてらまへての
物の足をいふ和足阿和
せふの下注徒然草多くのあへ給ひて
数日あへて出へかけたりけり

あー 〇ようー 〇ようかきさ 〇わろめ 〇わろめつさ 〇ひむろらさ

苗の高さ丈餘小至る枝か 葉竹のごく互小生む秋莖梢花を生む管の如くすして枝多 和葭一名葦阿之名 万五 たぐがわん安之べをさしてとびひさるあやたぐくー

あー 善解ラ續世繼五 履中紀則負惡解除 宰相とぞ人の申侍りー

たうふあそー けろあわ三條のあ

あーあこ俗 あかこ

あーあぶ俗 あんくこの下小

あーあひ 足よ物と洗ふあり 拾玉四 まづのめも大路

あーうたき 足と人よ打たさるあり 榮見を夢こころとめして御あーあどうこせ給ひたるあり

あーうら ありりの下小注天 月夜上門出下ありうらして行時さへやいもあをさるん

あーか 海獸なり水獺の状より肥え口微く尖り全身蒼黒色毛密柔より短し左右邊鬚

あり又尾と夾きて兩鬚あり尾獸尾の如く細小なり 海獺 和葦鹿皮出羽交易雜物中矣 夫廿三 ことが戀のあをを掃らふんぞ舟のよりとようぞと波間をぞ

あーか 伊豫俗 注上小

あーか 竹又葦かどして作る土あどと運ぶ器なり 和羅爾阿形小而高者江東呼爲箒

あーか 丹波俗 草名うわだつもの

あーか 蘆もて造る籬なり 催馬樂安之加支

あーか 万六 難波の國のあーか 吉今意一 あー

あーか 又九 あーか 思ひをたきて

あーか 冠らせたり又葦垣の穂末のこけ亂きてあるものわゆるを思ひをたきてたへたり又蘆の細きとこより小らめら間近くひよあけねがらうと

ひつちかきしともつとけ
よめるわらう

あゝかゝあかせ

あゝかせ俗

あゝかた

あゝがら枕詞

あゝがらわらう

あゝかゝ

あゝがら

難やうてい
葦河爾と

あゝがは俗

足小加あしの刑罰の具なり
和和名之加阿穿木加足

注上小

あゝあゝあゝあゝの續世繼六犬の
あゝあゝあゝあゝの有りて

浦風小葦の花のちるをもて此とこころ小冠

かゝあゝ三足ある器なり和鼎和名之

三足両耳和五味之寶器也

葦鶴葦鴨あゝあゝの如く葦邊小集ふ蟹を
り万六あゝあゝあゝあゝ難波の小江小のやつり

あゝあゝの下小
注上

あゝがひ俗

あゝかび

あゝかび枕詞

とつひたる軟又葦のこころ葉あゝあゝのやびき
あゝあゝあゝあゝのやびき

あゝがも

これこころめ
やも

あゝがも俗

あゝあゝあゝあゝ赤黒條あり翅小青羽
交りてあゝあゝ紫脚黒し

あゝがら俗

あゝがら俗

蛤類質黄褐色して葦の
ごとく文ある者なり

葦の芽あゝあゝ記上如葦あゝあゝ因藤騰之物而
成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神

万三葦若木のあゝあゝあゝあゝ○あゝかびの
葦の若芽あゝあゝ則苗なり葦あゝあゝの葦苗

葦鶴葦鴨の如く常種の鴨なり万十二葦
鴨のよきたけ池水をあゝあゝあゝあゝもゆけとぞのへ

魁の一種なり、頭灰色赤と帯ぶ眼の上小
小黒條小白條あり、胸赤黒、腹灰白、背灰碧

虫卵、あゝあゝあゝあゝの下小

注上類名あゝあゝ蝶魚あゝあゝ

同上、あゝあゝあゝあゝの下小
注上字あゝあゝ蝶蛸あゝあゝ

あがらむとぶ孫

我良乎夫禰あるはわりのめこそ
かろめこころいもい

あがら

あき 刈刈

あから 刈刈

伊豆の國足柄山の榎もて造まる船をり一説
小足の輕き船ともりふ方古わりの安之
足輕の義もて歩卒をりあがり盛衰足輕
共亂入てさう奉ま下知は
ようぬわり
○惡

神武紀神吐毒氣竹翁くちあ
く苦しは時もこの子とされん
流とくもさ孫とえわすふ

あきさつた

あきかき

あきこと

あきもの
めて候

毒氣やり神武紀予何憂眠若此乎
尋而中毒士卒悉復醒起
世小害をらと神をいあがり神代紀下有
殘賊強暴横惡之神者
ようぬ事なり著九番はさめたるあま
ものあて候りゆる猶あ

あきぬ

あきもち

あきもの
わたよひぬべと
あがり

あきもの

あきやまひ

あきらひもの

手端吉糺物足端凶糺物又即科素交鳴尊千座置戸之
解除以手凡為吉凡棄物以足凡為凶凡棄物

あき

あき 西國俗

あき 俗

邪神をいふ
和鬼 和名安之
ワレヒヤウキ ちり
和癘 阿之岐
惡疾也
夜萬比

あーらえん 音

法の作法ありてことごとく阿字觀
りつちりり ○阿字觀

あーげ 俗

足りてものを
蹴るなり

あーげ

馬の毛色なり白毛小黒まじり毛ありたり
和茨驢 今按茨者蓋初生 青白如茨色也
悪とあり 万五 安志家口もよけり

あーげん 加 刈 知

古今詳語 万五 安志家口もよけり

あーげん 俗

あーげひむら

馬の毛色ありげひむらげの
雜なる馬なり ○驄驢

あーげふち

あーげ馬にて駿ある馬をいふ 東六進上
御馬五足鹿毛駮革毛駮

あーご 俗

彼所の義なり 万五の條見ありて
宇國讓中 万五 待まらるる人

枕九 万五 万五

あーご

あーご同ト アスコスコ又 アツチアツチ
申拾 万五 万五 關山もまだぬ

あーご

彼所此所の義 アスココ 万五 万五
辨内侍日記の
万五 万五 万五

あーごもと

アチラフウ 万五 源宿 万五 万五
万五 万五 万五

あーご

鳥名 燕小似て大きさをいふ
万五 万五 万五

あーご

悪様にて人をワルイヤウ 万五 万五
源信集 万五 万五

あーご

葦にて造る簾なり 隆信集下 万五 万五
万五 万五 万五

あーご

ことを思ふ 萬岡職人歌合 万五 万五
万五 万五 万五

あーご

あわのひの
下注 万五

あーご

足摩の體言めて忿怒 又 万五 万五
万五 万五 万五

あーご

万五 万五 万五

足受利四管宇 あて宮ゆふ

あゝまきる カカサマ

あゝまきのつこ

あゝぞろへ

あゝれ

あゝた たふあだ

あゝた たふあだ

あゝた 俗

あゝた 俗

あゝた あゝた

毛カクサマ 足の麻手

神祇式刀二十柄 節別纏

四季物語 朝日けい馬のあゝぞろへ

朝の時 あゝた

足下の義 あゝた

草名 あゝた

次小注 あゝた

以字 あゝた

状小 あゝた

あゝた 俗

葉獨活 あゝた

花 あゝた

あゝた 鹹草

あゝた 紀寛宴歌

あゝた 和

あゝた 方士

あゝた 足駄

あゝた 下小注

あゝた 履

あゝた 用

あゝだのそのれ俗

履の齒の損じたるを入を替へつらうひ
あゝだのそのれを業とせざる者なり

あゝだのそかり俗

あゝだのその

あゝたば俗

草名あゝたばきの
下注せ

あゝたまり俗

足留りの義にてあゝつゝ其所小
足をどむむるなり

あゝたむた俗 クシキ

アラクタビレル 意あり 古今意三
身とつらとあゝつゝ糸がやわかきやと海士の

あゝたむ俗

あゝだらう俗 ○せんぞだらう

足をあらう
たらひあり

あゝたれが俗

星の名なり
○尾宿

あゝたむび俗

女あゝつゝ逢て別る朝とや小思ふあゝつゝ
拾遺意三 羽がたを糸と糸とあゝつゝ 晴もよ如く

あゝたを

アングハナラ かり
和履系之和名阿

あゝつた

北越の河小産する水松の類なり 万葉を
かき川らとせむね白ふととめつゝ 葦附

あゝつた俗 ○あゝたの

足繼の義にて高きところの
物なりとせむ料の発なり

あゝつた

葦草をいふ 後撰意 難波がかりつむあゝの
あゝつたのひとへもまをを我やへだつた

あゝつた

新六六 あゝつたの生掛 時小天地と人の品はさだまりふけり 奥儀抄あゝ
つゝの蘆の上の中あゝつたのやうにてある皮なりとせむものなり

あゝつた

あゝのころめをいふ 和名阿豆 蘆之
初生也

あゝつた

鷓尾琴小着る緒をいふ 雅装 ちりちり
かきとちりちりあゝつたの綱をひきまわつて

あゝつた

歌など書小文字をいふ 蘆の生たる
さゆつたをいふ 書なり 水の水のさゆつたをいふ 書たるを

あゝつた

水手とつゝあゝつた 歌繪とつゝあゝつた 花鳥餘情 あゝつたの色葉の蘆の葉の中あゝ
つたをいふ 書なり 花鳥餘情

あゝつた

あゝつた

あゝつた

あゝつた

あゝつた

あゝつた

字と書かたり水石鳥などをかたあもかたり中峯和尚の箇の葉がたに
りふ文字の體條の葉似たるが如きなり源義経あて歌繪をあもひく
書とのたすなり又あて手のさうりどもぞ心々小そくかたりとて
將のい水のいなりひあたりかかきなりさけけたる蘆のあひごちと難波
の浦に通ひてこきたるあて行なりりてのたうさきたる所なり
拾遺賀洲濱のき物小あての歌あて小くける中

あてがた

あての下
注せ

あてがら

あてまひ
あて

あてまひ

物の手足小纏ふか如く家族かたの
己が煩とせらるるなり

あてた

アライヤイといふなり源義経あてとた御馬小
うりあて一夜のたのあをど奉ま給ふ
足のさびびごちをいふ
あて小あて

あてざり

藁にて造りたるもの草履の如く短く
して足の半まであるあてよくかく云ふなり

あてら

雑々記あてらあての禮儀なり人の麩皮小座候とも
通るとたあてらあてぬぐまてたなり

あてらぐら

虫名あてらぐらもの
下注せ

あてらだこ

杖章魚小同なりして足最長
食へば必も酔ふ石距

あてらづか

草名あてらづかの下注せ
本和亭歴奈都奈

あてらあ

足クアヒガワリ又あてのいれもをり
和塞奈阿之史記古訓足疾左傳古訓足疾

あてら

あての體言
和塞奈阿之

あてら

あて足あてをり
小男也温器三足有柄也
甲属あてのりんの
下注せ

あてらあ

あてらあ
記下必自跛也和跛久那開字驥足奈戸
人馬あてをり足をそりて行をりあり
夫芒かたあてりある駒のあてなり

あてら

加キケケ

あてら

五月あてらり
あて

あゝなまこ

高麗樂の曲名
和葦波

あゝなまゆエル

足のアケヌアケよりナマよりユ唐物語アかえたる
つゝナれ人又アかえたるものナらユ

あゝなまゆエル水とらユまユ
行けり

あゝなまゆエル

アルキナレルアよりナまユよりユ源ナまユよりア
かえたる人のとく御堂アつたけり
足の上ナまユを
ぬナふ布ナより

あゝぬまひ俗あゝまユ

あゝ福枕詞

拾遺下あゝ福アよりナまユよりユ下ナのナをユまユをユ
けナ○葦の根ハ水底ナまユひユあユをユまユをユまユぬ

あゝなれがまたかびたまユまユ
たユへユあユまユたり

あゝのあわ

草名かまユのナ下ナ注ナせ
醫心ナ蓋草阿之乃

あゝのうら

足ノ下ナよりアわユよりウらユのナ下ナ注ナせ後撰ナあユ
のナのナらユまユたユかユもユまユゆユらユなユ浪ナより

あゝあユ
ぎユけり

あゝのかふ

足の上ナよりアわユよりカふユのナ
下ナ注ナせ

あゝのらび

あゝらユびユあユちユらユ東北院職人歌合男小なれ
たるナ數ナをユ足ノらユびユゆユらユのナ侍ナらユや

あゝのうら俗

つナがユたユのナ下ナ注ナせ
○脚蹠

あゝのけ

脚ノ病ナより
和脚氣阿之

あゝのあわ

あゝノあユちユらユ新勅夏さユたユれノ日ナをユあユ
まユひユまユぞユかユたユあユのナあユのナ軒ノ玉水

あゝのまユれ

葦ノてユ織ナるナ簾ノをユ儀式其上ナ敷席為為
神座節廻以葦開東戸懸葦簾大嘗祭式其

堂東南西三面並表
葦簾裏席障子

あゝのつめ

足ノ甲ナよりシ神代紀上拔テ
其手足之爪贖之

あゝのなま

葦ノをユ繩ナよりテ門ノけ悪鬼ト防グるノあり
和葦索懸葦索於門戸以禦凶也奈阿之乃

あゝの糸枕詞

方七葦根之糸もユ思ヒて後撰臺あユのナ
糸ノまユたユもユ又蓋あユのナ糸ノ夜ノ短ユくテ

○蘆の根のひろがりゆくゆくあひつるをもて移もごろりひうけたり又蘆の根にかあひつるをさへ入るひひうらうらものなれが日たると云うけたり又蘆の根の間のまじりかきせまうたると夏の夜のまじりたれよまじり

あゝのよな

あゝのひびくま俗

あゝのまがひ

あゝのまろわ

雁あゝのまろわこゝろもろろ

あゝのみま

御簾あゝのまろわあゝのまろわ

あゝのむんめ

倚蘆ふくろる葦の簾なり徒然草上詠聞の年をうりあられかる事にあゝと云々あゝのそとともなくあゝのむんめをいふてアラムイタハウ天和あゝのむんめをいふて

あゝのむ俗

あゝのわ

あゝのわ

あゝのまろわ

人あゝのまろわあゝのまろわ

あゝのむ俗

あゝのむ俗

あゝのむ俗

あゝのむ俗

あゝのむ俗

蘆の莖の中を生むる虫なり○蘆蠹虫

あゝのむ俗ひ小用ぬる矢なり陰陽式凡遊

餽料挑弓杖葦矢令守辰丁造備

葦もて葺る家なり續後意あゝのわのこわの

あゝのわの忍びゆる人小あゝのまろわをいふて

屋上を葺く厚くふたれたるをいふ六帖津の國のあゝのやんがたひまをいふて戀

足の指あり今義解手无二指

足无三指手足无大拇指

あゝのむ俗ひの下

歩行こゝの捷きをいふあゝのむ盛衰と

あゝのむ俗ひの同意なり蒙求和歌飛

脚のそとともなくあゝのむ天和あゝのむ俗

雨のそとともなくあゝのむ天和あゝのむ俗

とまやうやう
らん

あゝとらぶか

蟹類、螯微毛ありて足小毛なきものあり
和 螯蛸楊氏漢語 介品 彭蠡備前と唐人
蟹と呼、丹後ゆも多し、人家庭際小居る、甚不潔也、黄子して扇なり、甲隆
起ま 〇 螯蛸未と詳なり、然とても草原がゆとの入る介品小り入る如く
タラシガニの古名
わん

あゝとらぶか

大御國の號なり、神代小蘆のありく生ひ
まけりて有たるより、紀竟宴歌 草木
わん

あゝとらぶか

上小同ト 記上於草原中國所有
宇都志伎青が草之

あゝび

〇あせむ 〇あせば 〇あせむち 〇あせび 〇あせむ 〇あせぶ 〇あせび
〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ
〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ
薄く、互生ま冬灘ゆも、春枝頭白花を生む、続木の花小似て穂小出るこ
三寸許、後實と結ぶ 方七 安志地をささるる 君がり、のりのり

とらぶかあゝとらぶか 方七 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ
けふもれが安之癖のそとささるるけふもれ

あゝび

蘆を燃やして火をのふ 新古雜 かのあせむの
衣やせとてかりてたてあゝびのけり

たゝぬ日ぞ
なめた

あゝびたの

記下 阿志比紀能夜寐隠表豆久理 顯宗紀
脚 比木此傍山 方三 足比木乃山のまぐく小

方三 足比木乃石根 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ
比赤能 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ 〇あせむ
かゝるやうに城といへて一搦かる地を云て即ち山の平なる處をいふ山の周りに
限りありて自らひとめあせむのあり 引城をひたるといふひとらのまを省て
云ふありきれば此枕詞の足を引たる城の山と云つたをさす後よりたれど
山のこゝろにて用おはるものとして石根木の間又あせむ、とてこのまをさす
りへる皆あゝびたのたの山の
こゝろをさす

あゝひらあぐりのま

神武天皇のめん為小造たる宮の名あり 記中
故到豊國宇沙之時其土人名宇沙都比古
宇沙都比賣二人作足一騰宮而獻大御饗 〇此の宮の造り様小依ま
名なり宮の一方の宇沙川の岸なる山へ片うけて構へ今一方のちがれの中へ

大なる柱を唯ひとり建てて支へたる構へをさへ柱と足と
のふ事の後世あも四ッ足門をさへりふ例あり

あーびやま枕詞

榮えたる時のさへふたへてかむせ
たりやまの如くこいふ意あり

あーびやまひやま音

目ふたつちよふ
はら

あーぶ出雲俗

木名あせまの
下注

あーぶ俗

神代小葦を作りたる船あり
記上此子者入葦船而流去

あーぶ俗

あぬひの
下注

あーぶ俗

乘馬の四足白きものなり
贈馬和贈俗云河

あーぶ俗

舞やうふ足のよまびきやうふ源紅葉
かこの日景さやうふさうなるわがくの聲

あーぶ俗の面白きものなり
あーぶ俗の面白きものなり

あーぶ俗

加判クケ

あーぶ俗

星の名
元宿

あーぶ俗

草名葉蓋草ふ似て長く
秋穂を生む二三岐をこころ

あーぶ俗

足の糸
葦の生たる間をのふ源紫いさけあたるの
一聲さしよりあーぶ俗の船ぞえあるぬ

あーぶ俗

あーぶ俗のあせまの

あーぶ俗

虫名あせまのあせまの下の注

あーぶ俗

字蝶蛸類名蛸魚

あーぶ俗

水中の虫あり太さ燈心のごとく長さ六尺
より大なる首魚及蛇ふ似て小なり字蛸

あーぶ俗

上あせまの
以字蛸

あゝあゝり

貴人の御足を打ち撃つをいふあゝり

あゝあゝり 美濃(俗)もだろとぞあゝり

源書右近を御あゝりいふあゝり

あゝもと

躰魚の一種河内生む長二寸許
身色淡黒くして黒點あり

あゝもあゝあゝり

脚の下より古今序遠き所も
出たりの足もとより始りて

あゝあゝり

足をあゝあゝり間もあゝあゝり
夢路よりあゝりあゝりあゝりあゝりあゝり

あゝあゝり (音)

大納言の唐名○亞相職原抄其職掌與
右大臣以上參議天下之事然者大臣不

候之間奉行與大臣同故
云亞相之官也

あゝあゝり

筑前より出るあゝあゝりの金あゝり

あゝあゝり マミシメ

茶具備討集 蘆屋金
足をあゝあゝりあゝり

あゝあゝり (俗)

あゝあゝりの轉して戲まを

あゝあゝり

握りあゝり足の色々な糸もてかぎあゝり

あゝあゝり あゝあゝり

源繪全うらゝあゝり青地のこゝろあゝり

あゝあゝり (梵)あゝり

非天と譯す十界の一として其果報諸天に
似て天小あゝりあゝり非天とらゝあゝり

○阿修羅の原アスラの對譯あゝり

あゝあゝり

あゝあゝり

あゝあゝり (俗)

類名 糝 糝

あゝあゝり (俗)

歩行のうらゝあゝり轉じて
婦女兒童の上をもあゝり

あゝあゝり (俗)ハヒ

あゝあゝり

あゝあゝり

同ト○應接

あゝあゝり

他をアヒシラハセル

あゝあゝり

他をアヒシラハセル

あぶら

あぶらとりのへり 堀川百首 かげり火のわらうらまふ
氷魚のぢる網代の程をいふをあらまふ

あぶら

ひの木の薄岸又竹葦等を
網代のさやふ組たうをいふ

あぶら

網代車の略言あり 枕ニあぶら
走らせたる人の門よりこたりを

あぶら俗

鳥名大さ菜鷹の如く頭背尾共
深黄腹白く脚紅あり

あぶら俗

網代組よて造まる
垣あり

あぶら俗

網代組よて造りたる
駕籠あり

あぶら俗

網代組の
笠あり

あぶらぎ

氷魚とらう網代の木をいふ 万三物のふの八十
うぢ川の阿白木水のさうま浪のゆへ知れども
車の屋形を網代組よて造まるあり 源須磨
二三日うぢとありいどの水よふかさを渡り

あぶらぎらま。あぶら

給へりあぶら車のうち
やうれたるま

あぶらご。あぶらのこ

網代組の輿あり 大鏡三あまのここと
あぶらご。だふありけま

あぶらてんやう俗

網代組の天井
あり

あぶらのこ

あぶらご。小同ト 信太草子あぶらの
こ。八ちやうとらご。十二ちやう

あぶらびと

網代を守り人そのふ 万七 氏河の定せあり
ろ。阿白呂人舟とまふ聲とらこち聞也

あぶらびやうぶ音

あぶらびやうぶとらる。屏風あり
源集山里びるあぶら屏風あり

あぶらもり

あぶらびと小同ト 師兼千首迷とら聞とも
あぶら網代りとのまやひとのとらをやうん

あぶら

物の障りあるをいふ 頼政集あぶらひか
ことやあけんえ。うやうらうらうら

○是の万葉集ふまのこらうのあぶらひか小舟さうりありことある歌ふ
よして故障あることらるの譬とら中昔よりいふ語あり

あぶらひのつら

足のとらをいふ。あぶらひのつらあり 齋宮式別
脚案二脚類名足別案ツクエ

言

あーひげさみ糸

あーひげさみ糸
あーひげさみ糸
あーひげさみ糸

あーお

あーと

鷹指也松嶋軒記
鷹指也松嶋軒記
鷹指也松嶋軒記

あーとあーと

用弓刺止擧脚
踏教

あーとあーと

あーとあーとあーと紙を
あーとあーとあーと紙を

あーとあーと

アヲルサマ
源良殿の内の人足を
又葵

足と擧るあーと
神代紀下乃擧足踏行學其
溺苦之状雄略紀嗔猪直来欲噬天皇天皇

蘆の生ひまげりる處を彼是くはゆく
小舟なり
万十湊りの草別小舟さそり

草名わりのあーとの下注
本和蓋草一名阿伊奈

鷹の足緒なり
狩の時小鷹を放小遊ぎる爲
附るものなり
和戀手阿之乎在大岐豆奈所以綴

たれも
給ひぬ

あーとあーと

あーとあーとあーと

あは

あはあはあは

あはさか

あはさかあはさか

あはさみ

あはさみあはさみ
あはさみあはさみ

あはさる

あはさるあはさる

足のとれクシタル
類名蹶カハ源蓋天の
下あつるあはさる
あはさるあはさる

あはさるあはさる
あはさるあはさる
あはさるあはさる

大和國飛鳥の方より吹風
やめの袖あはさる
あはさるあはさる

古く大和國飛鳥より造り出さる
あはさるあはさる
あはさるあはさる

催馬樂律の曲名
飛鳥井

あーあは

かゝるあせひらき出てよひあせ
こゝろあせぬきこゝろ

あせ

つたひ

あせあせ

エユル

汗のタラ〜オチル又ナガレル
汗のタラ〜オチル又ナガレル
汗のタラ〜オチル又ナガレル
汗のタラ〜オチル又ナガレル

あせあり

加判

世の中のあつらう〜あせあり
黄ちりりぐ〜あせあり

あせがら

あせさきまらう

草名のぬぐりの
下注

あせがら

加判

あせがら

あつらうを明て物〜
出さるる

あせこた

加判

あせこた

あせこた

出雲

あせごら

あせごら

あせだん

あせら

草名のぬぐりの
汗の衣服あせごら
草名のぬぐりの
下注

續紀八養老三年七月庚子
始置按察使

あせつゝ加知加知

あせてぬぐひ俗

あせとり俗

あせぢ俗

あせぢ俗

あせぢ俗

あせぢ俗

あせぢ俗

あせのぢ俗

汗のカタミシミツ類名液

あせのぢ俗

汗をとる俗

草名俗

通泉草の類俗

小多田畔俗

神代紀上素戔鳴尊

春則填渠毀畔又秋穀已成則肩以絡繩

汗をか俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

あせ俗

以上木名あびの下注俗

馬の體中の汗の流俗

畔の徑俗

甚汗俗

今昔俗

草名俗

下注俗

五倍子を煎煉俗

汗俗

あせも 東京俗

あせもよ

風をよめ

あせゆく 加判ケケ

あせゆく 加判ケケ

あせゆく

あせゆく 加判ケケ

あせゆく

あせ 加判ケケ

あせ 加判ケケ

あせうた

あせうた 加判ケケ

あせうた

あせうた

あせうた

あせうた

あせうた

あせうた

あせうた

あせうた

木名あびの

アセポタノケルカヨリ海人手古良集あせもよ

水かどの浅くかりゆりゆりゆりゆり又ころろ

影のあせもゆりゆり〇此歌の水の

物の減ゆりゆり又物ごころの畧儀小

心を遣ひ氣ヲモム

人を親しと崇めたりと称あり天武天皇の

御代より朝臣と書て加波祿と定めたり

無央數と譯を央の盡なり筭者もその

數を知りてこれやとせりぬりどの數を

向ふ方をさしとけり詞ありあしこの條

併せるとり相國寺塔供養記あせと

ソナタとりの意あり宇藏下あせと

少將とりの意あり

あせととりの意あり

あせととりの意あり

あせととりの意あり

あせととりの意あり

あそびよせ カシスセ

あそびよを敬しそりあたり 万三 松のふた
あそびのやうくと國見所遊 云々 やうた
給ひて所遊 さあやあま

あそびよせ カシスセ

小児あそび アンバセル 枕二 児のめ
のたあ さあ 若君 さあ 御か さあ 住 さあ

あそび うかれめ ○あそびの うられづま ○ひ さあ ○ さあ

歌舞 さあ 或枕席と蓐 さあ 女 さあ 和遊女 さあ 源 さあ

あそび

梅能阿素 彈爾

樂 さあ 記上鳥遊 天智紀 于知波志能都

あそび

給ひける 又 御遊 さあ 高欄 さあ 手 さあ 遊びて夜 さあ 宇 さあ

あそびあうせ

カシスセ

あそびあうく

カシスセ

あそびがれた

カシスセ

あそびらさ

あそびらさ

あそ

あそびくら コキケルル

あそびわたさる レニルル

かゝるさたのあそくも
こたへ給へ

あそびたさる

あそびあつる ケケルル

あそびのしる ケケルル

あそびむらむら ケケルル

奉り給へるをさるせはを
あそびむらむら給へ

あそびゆさる ケケルル

ゆくゆく遊ぶ人々らのゆさる
あそびゆさるをさる

あそびめ

あそびも井人をさる
のこむらむら

あそびもの

あそびもの のあらあそび
のあらあそび

御調度どもひささのあそびものをさるは御遊びものさる
故ある限りは狭三とくは遊びものとも奉らんとのれはつへ

あそびを

藤原朝臣高経率遊男十人參上下社保憲女集夕づく夜
ひささを見せはあそび男の山のそ近くよひぞ来ふける

あそぶ ハヒケル

あそぶ ヒスルル

あそびもの レムルル

語彙集二
あそ
同上
〇冊八

遊て来る 武烈紀河津寐俱思寐

我簸多泥徐都摩陸氏理弥論
遊戯まるあそび 源東屋上達部あひさる

たふふ日して遊びわたさる給ひてはさる

上の體言 後拾釋教津の國のなほのこ

あそびて心をあそぶ 源東屋上達部あひさる

とくは安藤比奈具禮止

アソビワグ アソビカサ

手あそびの具 アソビカサ

源東屋 あひさる屋

あそびのゆき あそびゆさる

遊 遊女の下注は宇奈の使よるひさあそび
とあそびたはものゆきはさる

住吉 あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそびもの あそびゆさる

あそむる

レハレハレ

我があつぐう アハレ

源義家 『源義家』 『源義家』 『源義家』 『源義家』 『源義家』

あそぶ

ハレハレ

他におどろく バカニスル バカニスル バカニスル バカニスル バカニスル

あそむる

レハレハレ

他におどろく バカニスル バカニスル バカニスル バカニスル バカニスル

あそぶる

遊縁の字 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あそむ

朝臣の下 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あそむ

前條 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あつた

ニライカタキ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

筑紫の國の安多 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あつた

アタイヤラシ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あつた

上代の尺度 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

者手之義也 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あつた

めて實の ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

習志ぬ物 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あつた

ウハキ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あつた

あつた

君父兄 ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ ハレハレ

あれたかも

あれたがれた

あれたらち俗

あれたらへ

あれたらるケケケケ

あれたけこころごと

あれたけ

あれたけかつ世のもともた

あれたけ

あれたけ上のあれたけこ意異なり

テウドおろり類名死又恰カモ万十九ココせせらら捧てりらるるややくくははのの安安可可毛毛ゆゆらら青青きき蓋蓋

あれたらち俗源源朝朝良良のの義義ううたたれたれたハハアアヒヒテテややりり〇〇鱒鱒敵敵

あれたらるケケケケウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

あれたけこころごとウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

あれたけかつ世のもともたウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

あれたけ上のあれたけこ意異なりウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

あれたけかつ世のもともたウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

あれたけ上のあれたけこ意異なりウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

アハレサワグと

深山陰地小生ははるるものもの蔓蔓細細くくしてして絲絲ののここらら、葉扁扁柏柏に似て薄くく、冬黄黄赤赤色色小

草名のちやくさ

の下注せ

ウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

ウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

ウウハハキキノノアアラランンヒヒややりり伊伊ああたたららへへかかたたららへへ

草名のちやくさ

の下注せ

あだあだだららへへかかたたららへへ

あれたけ俗

あれたごけ俗

あれたごけ俗

あれたごら

あれたごこ俗

あだあだだららへへかかたたららへへ

あだあだだららへへかかたたららへへ

あだあだだららへへかかたたららへへ

あだあだだららへへかかたたららへへ

あだあだだららへへかかたたららへへ

あだしけ 引引シキ

あだしけな 俗

あだしごころ

ごころをこころもたが末の松山浪もこころも

あだしちごり

やうらふけぬらん

あだしの

野の露まゝあるとたかく鳥部山の煙立ささぐてのこ住もつらむささぐひまゝ

あだしびと

あだし 引引シキ

別段ラシイとのふ意あり 榮臺との御まつへの御聲あやうふ小まらせ給まをせあじう聞えり

吝嗇めてモラシラスルと

外ゴロあり 契りたる人の外ゆ又ころをうつまをいふ 古今大歌評 君をあたそあた

やうらふけぬムダの約束とて風雅意人の りさあだ 契の言の葉とよこと顔

透く葬地をりふあだの定ゆうら如事ゆゑ無常の地をかくりふあり 徒然畔 あだ

ホカヒト あり 允恭紀 是歌不可

聆他人 皇后聞必大恨

ふさあらしを状とりのああり 又勢ひ強くあたる 万十九 天雲とらふふ

安多之やも神も 散木中 やうらの板をりふあらし

かよひらん忍びもあへぬらもまあやひ

あだし

あだしかげ

あだしけ

たけりける 字 燻 阿太々

あだしち

あだしあだしあだしけ 濱松 四 やうらふ あだしあだし 榮鶴林 あだしあだし 給ひて

あだしむら

あだしむら

あだしむら

又クトイ あり 〇暖 万三 あらしぬひの筑紫の

またの身あつてのやうらふと暖くふとぬ

又クトサウ あり 源末 松の雪のそあだ

あけあふりつめら山里のこあらし

又クトイ サマ あらしあり 天四 あだしけ 春の

山む花のそととらふらふとせさ

又クトマル あり 〇暖 千里句題和歌 あらし

あらしあらし酒を寒さ夜ひひとの身

あらしあらし 天鏡 あらし

あらしあらし 皇極紀 説於賊黨 今知所起

あらしあらし 字 燻 阿太々

あらしあらし 岩代 國安達郡 あらしあらし 万七

あらしあらし 吾田多良真 あらしあらし 引

あたる人のこと
あたる

あたるがた 俗

あたるつる 元ツルツル

あたるな

あたるな 俗

あたるな 俗

散るを見る
らん

あたるな ハ口元ハ

あたるな

山川の浅き瀬のこと
あたるな

艶かす状と
りあがり

あたるつるを
りあがり 類名當

あたるな 源資 ウキモノ の名のたつなり 源資 ウキモノ の名のたつなり 源資 ウキモノ の名のたつなり

あたるな 源資 ウキモノ の名のたつなり

あたるな 源資 ウキモノ の名のたつなり 源資 ウキモノ の名のたつなり

あたるな 源資 ウキモノ の名のたつなり 源資 ウキモノ の名のたつなり

あたるな 源資 ウキモノ の名のたつなり 源資 ウキモノ の名のたつなり

あたるな 源資 ウキモノ の名のたつなり 源資 ウキモノ の名のたつなり

あたる

許呂母遠 厚顔抄多し賀と同韻ゆ
通よ 時 齒搦敷

あたる

あたる

あたる

つれごと 又樓の上 逢て多くの年父母の顔もあひ

あたる

興 而 臆

あたる

あたる

吾景 卷二

あたる

四十二

草名あたる 下注 記上 夜麻賀多 麻岐斯阿多泥都岐曾米紀賀斯流途斯米

あたる 下注

あたる 下注 天共 秋 来

あたる 下注 宇 後 薩 も ろ と 小 到 らん と

あたる 下注 男女 交 合 を り 敬 語 を り 記 上 唯 留

あたる 下注 其 射 和 花 之 佐 久 夜 毘 賣 以 一 宿 為 婚 雄 略 紀

あたる 下注 何 事 ふ と く と 為 事 の テ キ 又 と

あたる 下注 む だ ふ さ く 花 を り 和 木 謂 之 華 一

あたる 下注 草 謂 之 榮 々 而 不 實 謂 之 英 一

あれたはら

○あつたき

腹の變急痛む病なり

和云阿太良太良腹急痛也

あれたひ

ちりちりたるせあれたひともれぬ

物の代わり
時價
宇志
藏人所もてあれたひともれぬもの

あれたひえ

あれたひの下小注
皇極紀長直

あれたびと

びとの我をふるせる
名ゆこそ有けき

心定ゆるさうれあつたひ人なり
古今意五
あれたひのへいよそあだき

あれたひあれたら

酒小堂中うらうめや
寶珠とのさことあれたひわりのへい

價のつゝべたやうもあれた世小稀ちりる寶
ちりる
カ三
價無寶とのへいよそ一抔の濁ちり

あれたふ

不克又不能ハタ干訓三十徳やううむ人の判者小あれたふも落窪北の方
いともあれたふも思ひて夫
のり
心ゆあれたふぬ

この多くもあつたふは竹かや姫の罪をつくり給へりけきかか賤しき
いともあれたふも思ひて夫
のり
心ゆあれたふぬ

あれたふ

他小物をあれたふなり
あつたふの四段も活用せれども今下二

段小のとりへり
カ三
とりのみこひむすくごころ小取與物之無者

ヒトリニスル
徒の意夫
行とゆる

あれたふ

草のかりりのあれたふ
八月小もらまを

あれたふ

あつたふの類なり
アタフタスル

あれたふ

物の定りもあつたふも多きよのふ
アタフタニクル
アタフタニツカフ
かたの類なり

あれたふ

不與
唐物語
たちまらちか孫千両とあつたふ

あれた

あだある

俗小児の「アバケル」おもひ「類」なり「源」露
まじり「あだん」か「狭」二「やう」が「顔」ハ
こらふ「あだん」を見給へ〜と「あだん」〜「まじり」

あだん

姓なり「姓氏録」佐伯直云々伊許自別命
以扶復奏天皇詔曰宜汝為君治之即賜氏
針間別佐伯直佐伯者前所賜氏姓也直者謂君也
比延と訓る所あり「和名抄」和泉國の郷名小山直多倍とあることを合せて
阿多閉と訓べ〜の阿多比延の
比延と切めて閉とりのあり

あだま

類名天窓マタ
頭の「テツ」をりの「和」顔會一云天窓和名阿

あだまうら

頭の大あまをりのあり「轉」し「始め」巨
大ある〜の終り小あまをりのあり

あだまのうら

か〜らのか〜の
下小注

あだまのてふへん

雷の天邊より出れる語めて
頂上をり

あだまのさうら

あだまのさうら
あま〜

あだまのさ

賊の襲ひ来らん〜と邊要の地を守る
事あ〜のあり「方」六「賊」守筑紫のあり

あだまのさう

人数小應〜物の割付をさ〜のあり物を
あだん又「贖」錢をさ〜のあり「詞」なり

あだむ

仇〜と視る
意をりのあり

あだま

他仇トミラレを
り〜

字「快」也強也類名「譌」又「對」マタ「源」五書
この「監」小あだまをりてのあり〜のあり
ろ〜のあり〜と〜のあり〜のあり〜のあり
と〜のあり〜のあり〜のあり〜のあり
二度の流離ふ値〜のあり〜のあり〜のあり

あだん

葉の扶、葉の葉を去りたる莖の如
ら〜と、西邊の刺あり、中心より長き

花莖を抽出、淡紅又黄花を開く、其性寒を怯る、
此草の「脂」即ち「蘆薈」なり、○草「蘆薈」

あだむ

虫名、こあ〜の
下小注

あだめ

艶色ニセル〜を
り〜

あたるよ

夜と賞翫と惜詞あり 方九玉くげ
あけゆくとき 陰 夜とくもでうきて
ひこりわも祓ん 後撰春 あたる夜の月と花とを
あつし心あまてん人ふまをさや

あたる

あたるの當の義ゆて其邊より 記下 和賀
美賀本斯久 遷波 迦豆良紀多 迦美夜 和藝
幣能阿多理 源榮 もとの品時世の覺え打ゆひやんことあたるの
うちのちもあけきまひちらさたるん いささうゆりせ

あたり

あたり 俗

上の意として事の思ふ如く
成りたるをりふ
アチチソコ ちり 源 御帳御屏風ちど
あたる たてさせたる 又 柙 板屋

あたる

どもあたる り
かりそのあたる

あたる 俗

シクシキ

クラモノニカネル をりちり 柙 あたる
ら り 時めた花や たゆ
人の心 あたる 又 ささる 所ある
言辭 をり

あたる 俗

近所近辺

あたり 俗

ら る べもの あたる ヒルナキ をり
大鏡 七 南京の そ を ぐ の あ り る 寺 ど な

あたる 俗

あたる を ぐ れ
射 る より 出 れ る 詞 を る べ

あたる 俗

あたる を り
同ト 〇 四下邊

あたる 俗

ソレハツ ち り
同ト 〇 當然

あたる 俗

人の威風強 く り 其 邊 に 寄 つ た が れ る
散木 上 も ざ れ る 梢 と も も り

高 ら う ゆ あ た る と も も り 八 重 櫻 う ち 太 平 三 け の ひ の の 聲

あたる 俗

物 は あ た る 事 は あ た る
物 は あ た る 事 は あ た る

あたる 俗

物 は あ た る 事 は あ た る
物 は あ た る 事 は あ た る

記上浴此海鹽當風吹而伏高山尾上雄略紀匹夫之志難可奪方屬乎臣
職員令彈正紩不當者兼得彈源順磨罪其ゆかたることも此こころゆかたひ
つらゆかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかた
たふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかたふかた

あたる 俗

中の義ちり食ハアタル毒ハ
アタルのあたるちり

あだこぶ

又専らあはるあだこぶ
給てま

あれたむくも

既亡遂報讎何死人之
無知耶

君父又己の讎をむくむかへてこころゆか
カタキウチラスルちり仁徳紀時人云田道雖

あち

彼方ちり催馬樂本安知乃
山世山末世山也世也

あぢ

如き者あり入字の形とちりく相並ぶ俗ハセイゴとちりハ竹筵魚内膳式
千簾三十隻和鯿和草庵集物名あめちりて川も水よせばあちこち舟人

こひ こまひ
さへ

あぢり

鳥小似て小く頭青緑黄赤を帯び翅灰色
胸黄赤しく小黒點あり腹白く背灰白

あぢらひ

食物の酸苦甘辛鹹等の味と云ちり轉して
物の美不美とちり三五記書本詩歌の味と云ちり

あぢらうり

瓜類と云ちりうりの
下小注

あぢがも

鳥名あぢらの
下小注

あぢさゝ

ムヤクの意又轉してオモシロクモナイとちりあり
紀竟宴歌あぢさゝあぢさゝあぢさゝあぢさゝ阿知

支奈久よとせのあひごころちり
松とあぢさゝあぢさゝあぢさゝあぢさゝあぢさゝあぢさゝあぢさゝあぢさゝあぢさゝ

あぢこち

彼方此方ちり中務内侍日記こちばあぢこち
ゆひちりちりて黒木のこちわあぢこち

あぢこ

木名あぢこさのこち下小
注は字賣子木知

あぢむ

あぢむの (枕詞)

あぢ鴨の友りぞあぢむひて群りて飛行のたふ
又人のささだかまをあぢむたふとて

あぢめ

神樂の作法の中あぢめ名目なり
神樂阿知如作法本阿知女於於未於介阿知女於於

あぢも 播磨俗

草名あぢもの
下注せ

あぢめさん 長崎俗

支那の人を
り

あぢむらづひ 俗

糲菜莖菜莖等細く小瓶にて酢酒
醬油漬たるものなり

あぢこちら 俗

あぢこちら同
彼が此がなり

あぢむむ 俗

彼方をむむなり
轉じて人の
我れむむむむなり

あづ 俗

人小應答
まろ詞

あつらた 俗

古く厚き地のものをあつらたなり
今も
らせられたるもの地厚織たる物なり

あつらもの

あつらもの同
○羨宇
あつらもの
木あつらもの

安法法師集
あつらもの

あつえび

悪疾かたを人あつえびなり
持統紀
獨薦瘡貧不能自存者賜稻獨復調役

あつら

青草を束ねたるものなり
神祇式
以草表裏以席地敷束草

あつかは 俗

物ごころ恥は顔の皮厚
り
○鐵面皮

あつかしき

あつかしき
源能のたぐり
木あつかしき

あつしき
あつしき

あつかる

シクシキ

暑き状をのりかたり 宇樓の上を給へる人々
せぢろ人けあつらふれらるる給へる

枕九このまきくただりこあつらふれらるる給へる
散木上世の中のもつらふれらるる給へる

あつかひ

あつらふの體言源東屋さゆめくふこのあつ
らひとて狹一此人かふとや侍りあふ

御まへの御あつらひものうららひ侍らん今昔# かく便か
ちりふたきくその御縁をいふあつらふ

あつかひらさ

扱ひ種の義源自宮一條の宮のまきあつらふ
らさ持給へるまきとらとまきとら

狹三人の物りひらきまきとらとまきとら
あつらふらとまきとらひの〜け

あつかひめん 俗

人の鬪争かををあたのあつらふ
ひととりあつらふ

あつかふ

身熱あつらふてあつらふとらとらとら
神代紀上悶熱懣懣安閑紀伏地汗流

あつかふ

物をとりあつらふて
セワヤクあつらふ

あつかふをせさる

他と〜物とトリアツカセルと
りあつらふ

あつかそ〜

同上

あつかそ〜

他物とトリアツカセルと

あつかそ〜

我があつらふ物や事の
アツカセルとらとらとら

あつか〜

物をあつらひてあ
つらふ

源景本あつらふ親めたるあつらひたあつらふ又神あつらふ人あつらふとらとらとら
またあつらふ御心をあつらふとらとらとら

あつかま〜 俗

耻ラ耻トオモ又状をいふ
アツカナル意なり

あつがこ

厚き紙をのふ左右京式標紙料厚紙五十三張
著五厚紙を懸物ふつらふれたりけらふ

あつかり

あつらふの體言其物あつらひてあつらひ
らけれる人あつらひヒキツケ人又ルspanとらとら

源々類あつらひるの〜けの〜とあつらひ
今昔# 其の御堂の預かりける法師

あづかりち俗

他よりあづかりたる地なり

あづかるレリル

自ら物をあづかるゆを
Eキウケルなり

あづかるとセスル

他より物をアツカレルを
のふなり

あづかるとスル

同上

あづかるとル

他小物をアツカレルを
のふなり

あづかるとル

我々のあづかる物の
アツカレルを云なり

あづかるとル

物を預りてあるを
のふなり

大和あづかるとル是をあづかるとせりあづかると給ふやと小
續世あづかるとたるものやとせりあづかると

あづかるレリル

關係をいふなり又被るものも俗に
御賞詞アツカル御恩アツカルなど云もこれなり
他よりアツカレルを
のふなり

あづかるとル

あづかるとル

同上

あづかるとル

他よりアツカレルを
のふなり

あづかるとル

我々のあづかる物に
アツカレルをいふなり

あづかるとル

アツカレルを
のふなり

年中行事歌合判詞官幣あづかるとせ給ふ遊仙窟關今昔我畜生の道に
墮て難堪苦患あづかると事皆先の世に施の心無依なり又佛の御名を
唱へて利生あづかるといひて五百人異口同音を擧て閑居友上あづかると
あづかるとあづかるとをいひてあづかるといひてあづかるといひてあづかると
たるの借字なり

あつクシキ

暖かるとの甚くは
なり○暑

あつレリル

あつとあるを
いふなり

源常夏いとおつた日ひんぐのつりどのふりて給ひてまを給ふ更科日記
いとおつたりいふ此水のつらふやまをいふ見まが玉葉夏行あつとむうの

あゆみふたりありの風さへ
あつき夏の小車

あつき

クシキ

あつてあつめやうあつるーげふ見えさせ給ふ
身やとりてあつた又火ふあたりてあつた
ちとあり○熱源屋身ものことあつる

あつき

クシキ

あつきの死なり轉して粗略あつたネン入ル
ことあつものへり○厚崇神紀厚饗良容
薄きの死なり轉して粗略あつたネン入ル
ことあつものへり○厚崇神紀厚饗良容
雲もあつて見えあつるささきとく小日のいけさやうふ

あつき

音

よかぬのたわり

あつき

俗

着ものやあつて

あつき

あつあつたあつあつたあつあつた

枝葉豆似て小く、大小二種あり、
大なるものをだのわらんあつきと

稱止種類多し記上故所殺神於身生都云云
於身生小豆大膳式上大豆小豆各三升

あつきのちこ

俗

木名うらひまのきの
下小注也

あつきのあつ

あつたあつものあつもの
あつたあつものあつたあつもの

小豆を揉てた
たる際あり土佐

十五日けふあつた
があつた

あつきのあつ

俗

木名下野日光の産葉形之形をりふ似て
圓短鋸齒あり、五月頃五瓣白花を開き

實を結ぶ營實の如く熟せれば
赤し因て名づく

あつきのあつ

織地の太き縮あり盛衰が三厚線二匹
小袖十重長櫃ハ入もて

あつきのあつ

赤小豆の花あり薬用あり
本和府肉婢神酒齋小豆花名也

あつきのあつ

あつたあつものあつたあつもの
あつたあつものあつたあつもの

小豆を揉たる
飯なり

あつきのあつ

次ふ
注也

あつきのあつ

小豆をつけたる餅あり神祇式小豆餅
十合○又小豆の煮汁を色着るとも然り

あつきのあつ

戀の情をいふ詞ありあつたあつた
心のあつたあつたあつたあつた

あづらケル 九ノ九ノ九

他小物をアツケル引ウケサセルと

あづけセ 七ノ七ノ七

他とて物をアツケサセルと

あづけシ 七ノ七ノ七

同上

あづけル 九ノ九ノ九

他小物をアツケラレルと

あづけリ 九ノ九ノ九

我があづけらるる物のあづけ

宇後道のこととていふはあづけ

あづけイ 九ノ九ノ九

竹妻のおうちあづけとやわをせ

あづけ

熱て苦き状とていふなり

あづけ

暑さ状と云なり

あづけ

暑氣の中うたる病とていふ

あづけキ 九ノ九ノ九

○暑万九 熱辭注うた

あづけチ 九ノ九ノ九

他ふとせあづけたる

あづけシ 九ノ九ノ九

敬篤さくあきれたる

あづけル 九ノ九ノ九

枕七 くらと色と

源 九ノ九ノ九

あづけセ 九ノ九ノ九

形状あづめがしその下小注は

然もてとも和名抄小楸をひさだて訓一梓をあげること訓と別出せり

ひさだて今も其名存まらぬがしをふあづめの名存らばとこのへども

あづけシ 九ノ九ノ九

仁徳紀智破擲臂等子泥能和多

あづけル 九ノ九ノ九

梓弓を弾き神を降して神の

あづさひ

あづさひ枕詞

梓弓すばりの弓なり方三梓弓ひくは
中めくよめども後の心とまりぐさぬも
方七梓弓引つの心なり又十四安豆左由美
よしの山べの又安都佐由美まなり
古今春上あづさひの心なり又なるさめけふ降ぬ
○弓引ものの心なり引とつげ又ひけ本末の我く入よる故おとつと
つげたりは名とつげれる弓の常本末との事とひくはなり
又引とたふ弦音のなるものなりよよりておとつげたり古今なり
句をたてて張とのひくは
たるなり

あづさひ

あづさひ俗

あづさひ

引しし引

身もあづさひ侍る小源相壺のとありくなりぬたもの心をけふ
ささぢちなるも又ととところのありくなりぬたもの心をけふ
あづさひ心なりぬたもの心をけふ
ヨワルぬて病の甚とおもひて正體なりぬを
りぬたもの心をけふ神代紀靈運當遷雄略紀弥留

頭宗紀詔曰老嫗冷僻羸弱不便行歩
宜張繩引經扶而出入天武紀病

あづさひ音

あづさひ俗

あづさひ

ともはとかうん又名はあづさひなりぬたもの心をけふ
もの袖の香やせん○あづさひなりぬたもの心をけふととと
あややうりて一つの名と
あづさひなりぬたもの心をけふ

あづさひ俗

あづさひ俗

あづさひ俗

あづさひ

あづさひなりぬたもの心をけふ
音便なりぬたもの心をけふ
あづさひなりぬたもの心をけふ
同ト
あづさひなりぬたもの心をけふ
あづさひなりぬたもの心をけふ
あづさひなりぬたもの心をけふ
同ト
あづさひなりぬたもの心をけふ
あづさひなりぬたもの心をけふ
夫か春の夜の月也と
なりぬたもの心をけふ

あつぢ俗

草名あつぢのあ

あつぢころち俗

あつぢころちのあ

あつぢのそら俗

あつぢのそらのあ

あつぢもんもん音

あつぢのあ

あつぢわ

あつぢのあ

又九 又九 棚屋張紐布
上之八字

あつぢわ

あつぢころち

この 転訛
あつぢ

あつぢころち俗

鳥名あつぢの
下小注

あつぢのつと

合華あつぢのつとを惡くして神の咎と夢るを
あつぢのつと神功紀是時晝暗如夜已
經多日時人曰常夜行也皇后問紀直祖豐耳曰是惟何由矣時有一老
父曰傳聞如是惟謂阿豆那比之罪也問何謂也對曰二社祝者共合華歟
あつぢ俗。むを福れ。やまをり
下野日光信州木曾等山中の産、葉
楡に似て大く三尖鋸齒あり、枝葉

あつぢ俗。むを福れ。やまをり
軟くして下垂れ、蝦夷人此樹皮を績て布とせば、
これをあつぢ俗の楡の一種なり。

あつぢ俗。むを福れ。やまをり
熱き灰なり
字煨阿豆熱灰也

あつぢ俗。むを福れ。やまをり
冠の磯のあつぢをり西三條裝束抄臣下
冠少年薄額、中年の後厚額なり

あつぢ俗。むを福れ。やまをり
絲の総を多く着たる鞞をり東御馬
十足懸厚黒き馬の七寸小餘て

あつぢ俗。むを福れ。やまをり
太く選き白覆輪の鞍置て
厚懸厚鞞をり六帖五あつぢをり東御馬

あつぢ俗。むを福れ。やまをり
厚き袋をり六帖五あつぢをり東御馬
下小注

さむしも永久四年百首きられたるも薄紅のあつふせま
色ふよりせけさむしむううくくやーを

あつふせま俗

學たきの義わり

あつむらたき俗

上のあらまり

あづま

東國をりふ景行紀日本武尊每有願弟橋
媛之情上故登確日嶺而東南望之三歎曰吾

婦者耶婦此云故因号山東
諸國曰吾婦國也

あづま

あづま琴をりふ源若紫あづまをまがたたて
又竹川人々あづまをりふよくかき合せたり

あづまあそび

歌曲の名わり○東遊源若紫あづまあそ

あづまあそび

東國より出るあらびあり神祇式東叢一斤

あづまうた

東國人の詠歌をりふ萬葉集又古今集の
載たる東歌をりふ万四東歌

あづまうた

あづまひの下注を
以字東人ウタ

あづまわらげ

東國より衣服の裾をハシリタルをりふあらり

新六五五賤のあづまわらげのあき衣
あらりた川のさそととららん

あづまざり俗

山野の自生まる小草をりふ春月花莖を
抽淡紅花を開く菊花の如し又白花

長辨のものあり

あづまざり

東國より出る下品のきぬあり左右京式東
總隱源東屋の暖あるあづまざりぬもを

あづまげ俗

たとを付たる
履あり

あづまごころ○あづまごころ○あづまごころ
○こころん ○あづま

琴の属和琴をりふつかり
體源抄或云日本琴我朝本

より有き古神の作造長六尺二寸
絃六筋又東琴

あづまごころ

東國人の聲音をりふ源東屋賤のあづま
ごころのあらりたるものともをり出けり

あづまぢ

東國をりふ六帖東路のあづまぢをりふ
かぞへつあらりたるものちをりあらりたるもをり嬉しき

あづまぢ

あづまづ

和邊鄙藪豆

あづまど

あづまあかり

あづまのうた

あづまのらふ

あづまのこ

あづまびと

あづまびと

入たるをよあづま人ともあも

あづまびと

京都の官名あづまなる故東との云ふあづま平将門下総の國小叛
逆せし時定めたる官名なりとのあり誤り也古書に東百官の名付たる
人あづま近代關東の武士の名多しあづまなり

あづまめ

あづま又安百首あづまなりあづま戀をあづま思ひけん

あづまわ

あづま和四阿あづま

あづまづ

あづまら

和邊鄙藪豆

歌曲の名なり
風俗安津未知

あづまの轉じて東人の義ありあづま
東國の事あるをひろく邊鄙のことあり

あづまびとの下注あづま方ニ東人の荷向の
篋の荷の緒も妹々情も衆あけるかも
東國邊鄙の語の
詭あづま

東國の方をりあづま伊京あづまなりあづまの
かたよまを所りあづまめふあづまめたけり
東國をりあづま方ニ鳥之鳴吾妻乃國の
あづまをりあづまめたけり

あづまの下の注あづま後拾遺あづま坂の
關のあづまあづま籠や何あづま預り

東國の人をりあづま源實例の御莊の預り
ともあづま割籠や何あづま預り

伊織多門左膳求馬あづまの名称を云ふ
○朝廷の官名似たる故百官あづまなり

東國の女をりあづま頼政集あづまわめとねぎ
めあづま下野あづま河原あづま千鳥あづま

四方へ葦下あづまたる邊鄙の家造りあづま
梁塵愚案抄あづまわめあづまわめあづま

あづまあづま集りたる軍人の
一致せざるものなり○鳥合衆

あづまあづま物のあづま
あづまあづま集

あつまるまを

レシズレシ

他としてアツマレルを

あつまるまを

レシズレシ

同上

あつまるまを

レシズレシ

解てあるを

源義繁のうらみ人まわりあつまるまをね晴上ささめふのそだつあつまるまを
落窪中將どめあつまるまをどども参りあつまるまを佛足石歌四の
つと五のもの阿都麻禮流きたをた
身まがらひまきり

あづまよひ

朝群四為東孺之者依其勞効預榮爵者古今之例蹤跡多在公事根源
あづまよひ内侍司の被官ふある物よと行幸の時姫松とて
まうま馬ふ乗て供奉まをこれが車あり
是ハニツ子を用ひ

あづまよひ

あづまよひ

東國の男をのり源宿あづまよひあづま
まの物あへるあづまよひ
東國の若き女をのり夫十六さめる夜あづまよひ
あづまよひ風もたあづまよひあづまよひ

あづまよひ

あつむだ

月さたる
見ゆ

あつむる

レシズレシ

自ら物をアツメルを

あつめまを

レシズレシ

他として物をアツマレルを

あつめまを

レシズレシ

同上

あつめまを

レシズレシ

他小物をアツマレルを

あつめまを

レシズレシ

我ガあつめまをアツマレルを

宇国源むうり今中を思う給へあつめまを源繪合あつめまをある繪
どもあつめまを紙どもあつめまをあつめまを給ふ又あつめまを繪どもあつめまを給ひて

あつもの

菜肉を煮つる湯をのりアツマレル通して
りあつもの九恭紀御膳羹汁凝以作氷和

有菜曰羹和名阿源若菜上 ころ菜の御あつものよあつる

あつもうさ俗

この日を畏る鬼督郵の一種あり

あつやう音

厚き紙をりふ薄様むむと云へりあり万葉仙覺鈔鎌倉右大臣所携万葉集

表紙用厚様紙

あつあつレニレニレニ

病のおもりたるをりあり持統紀篤瘡源御法かくたのもしげあはたさふあり

あついの給へ源澤標あついの給へるよ

あつらあつレニレニレニ

自ら物をタラミアツラレルをりあり

あつらあつレニレニレニ

他ぞして物をアツラサセルをりあり

あつらあつレニレニレニ

同上

あつらあつレニレニレニ

他小物をアツラヘラレルをりあり

新勅雜二西行法師自歌を歌合ふつがひ侍りを判の詞ありへ侍りける千載舞下近きためし堀川の流ををらそそ浪のよりらる人よあつらへる

あつらあつレニレニレニ

アツラヘイヒツケルをりあり古今奉ふく風小あつらあつものあつらあつひとも

あつらあつレニレニレニ

自ら物をあつらあつをりあり

あつらあつレニレニレニ

○當又中又亮又點他ぞして物をアツラセルをりあり

あつらあつレニレニレニ

同上

あつらあつレニレニレニ

他小物をアツラレルをりあり

あつらあつレニレニレニ

我があつらあつ物のアツラレルをりあり

あつらあつレニレニレニ

又ク頭袖を御ろふ

源帚本あつらあつわねるよとと中ふりあり又ク頭袖を御ろふ

よおせし給へる
御そぞめと

あつらふ

和泉式部集 あつらふ 丹後守爲忠百首 夏草花あつらふ
綿のよきもの
あつらふもの

あつらひられ

あつらひざ

あて

と音ふきあて
よとくふ

あて

あて

父のつへり 榮本編 ことさのうをあての御
とふたてつらうんとの給をさるあつけも
ギヤシヤヒンガヨイ 宇國議上 見まづ
あてふちのめれ 又仁壽殿の女御

のやうゆてあもやせ給ひつらあてふこのめれ
源橋姫 あてふちのめれ 聲しとひれ入あて

あて

あて

あて

白菊の花 山家上 五月雨の行づき道の
あてふちのめれ あてふちのめれ 流

あて

あて あてふちのめれ 十人つげ豆をさやあてふ出た

あて

あて

あて あてふちのめれ 落窪 あてふちのめれ

言彙卷二 六十一

木と削る 下あて具あり 雄略紀 木工
猪名部真根以石爲質 擲斧劉材
石の打盤あり

メアテ あてふちのめれ 古今秋 心あてふ
折らさや折らん 初霜のあてふちのめれ

あて あてふちのめれ 宇藤 あてふちのめれ

あて あてふちのめれ 馬小の詞あてふちのめれ

あて あてふちのめれ 源 あてふちのめれ 給ふ
物事をあてふちのめれ あてふちのめれ
落窪 あてふちのめれ

あてがひ

あてがひ候 ○所領まど人あ
て行ああありへり

あてがひぢぢ

あてがひの心あ任せ物と
あてあてあてあて

あてがふ

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがへる

あてがふの體言後花園院御消息よつ孫の
竹園まどの御あてがひあてあて候とん

あてがひぢぢ
あてがひの心あ任せ物と
あてあてあてあて

あてがふ
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがへる
あてがへる

あてがへる
あてがへる

榮王のあてがひ
塵添蓋叢抄 率かて 乳母の文
あてあてあてあて

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてがふまはる
あてがふまはる

あてははるる カレカレ

あてははむ カミカミ

あてははるるはあてははむの類なり

あてび

あてびと

あてぶと

あてぶる カレカレ

あてびとあてぶると

あてやうらる カレカレ

あてと

あてははるるを云ふ

類名擬カレ
艶美ある様子云へるゆてイロケアリサウナと
りふ意あり 濱松二山のふもとある家のうち

あてぶるの體言ゆて

貴き人とりふ源東屋のゆめたる

其人小冠んとて官より下ま公文をとりふ
朝群三民部省位田元文

美ふる状又高貴ふる状をとりふあり
源東屋三よりた君だちとてよまはる

冠認るといふ意あり

類名擬カレ
拳と以て人と御をとりふ
彩術の詞あり

あてもあは カレカレ

あても

あてもあは候をせし
まうとて

あても カレカレ

あても カレカレ

あても カレカレ

あても

出される

あ

あは心のせんたごふ
あはゆふあ

あ

あ

メアテあはをりふ山家上五月雨の行べき道の
あてもあは三小笹が原もうはるあはとて

箭を物小射當つる事とりふ 今昔五此の
様の當物あはる今箭の落るしとて

物の間又下あはアガヒて
置くものをとりふ

物をかゝるを占ひあはるを

馬のりふ詞あり馬の物音小驚るを

アテモカヨイアガロイとてとりふ
貴やうありやうの形状をりふ辭枕四又
あはるあはるのりとあてやうあはるが

足のあはと云ふあり 〇跡佛足石歌 あはと
らとてあはと云ふあり阿止を見

あこたれ

後と先とあり 今昔 圭山へ入る

あこたれ 俗

前後を顧みざるをいふ轉じて
思慮あつた人ともいふあり

あこたれ 俗

跡式の義ゆて
跡目同ト

あこたれ 俗

後の方へ漸く退くあり
立つるも居るもあり

あこたれ 俗

上と同ト

あこたれ 俗

虫名あこたれ 俗
下注止

あこたれ 俗

行軍の時後ゆつ
兵と云ふあり

あこたれ 俗

人の通行あつたをいふあり 新勅 秋の
風やうらうらとありぬらんあこたれえもつる

あこたれ 俗

庭の萩原 續拾 秋 續拾 秋の
つもるもあこたれえもつる庭の白雪

あこたれ 俗

霊とせぬ長くともめ給ふあり ○垂跡
榮 天の珠 あこたれえもつる人ともいふあり

あこたれ 俗

このこやづら入やきとひもせ
心もあつたあこたれえもつる

あこたれ 俗

父の跡をつぐ子を
いふあり ○嗣子

あこたれ 俗

足あこたれをつらと云ふあり 續千 春
やうらうらとける山路ともあこたれえもつる

あこたれ 俗

花ふこせまれ 新古 庭の雪ふこせ
あこたれえもつる

あこたれ 俗

物を書つらと云 新千 雑上
ころの浦や思ひ

あこたれ 俗

よりも濱千鳥あつたけそあつた
びを重なる

あこたれ 俗

旧跡の義あり 万七 り
たの大官人の

あこたれ 俗

跡所奥つ浪来依りざり
せか失

あこたれ 俗

後の例とせらるる 安閑 紀
籍此祈生

あこたれ 俗

永為鑒戒別以狹井田六町
賂大伴大連

あこたれ 俗

追福供養とせらるる 新後 雑
苔の

あこたれ 俗

下あつるもせぬ名を残り
あこたれえもつる

あこたれ 俗

露ぞこころ 新千 釋教
天がけりさこたれえもつる

あことむら

山家下

行方を見とむるをりくあり山家下雪一の庵のつらさをさへてあをめて

あことむら

山家下

跡をとむるあり源真柱此世あことむら又推本のよの中あことむら

あことむら

俗

あことむら

あことむら

山家下

物のゆへありあをねぬ意あり

あことむら

山家下

物のゆへありあをねぬ意あり

金葉夏古今遠

白波のあことむらあをねぬ意ありあをねぬ意ありあをねぬ意あり

あことむら

山家下

人跡たぬるをりあり又人の足あとのあをねぬ意あり

あやのものをあも今も松風庭をうふあり山家上とんる君夕らあもあ

あことむら

俗

あことむら

あことむら

何の詮あり無益のあことむらあをねぬ意あり

あことむら

跡もあれたるをりあり徒然草をねぬ意あり

ひと雁鳥をねたれうけり思をねたれ

あことむら

跡のあれたるをりあり依る所あれたる難問はるをりあり天武紀上朕問王卿以無

瑞事仍對言得實必有賜考課令集解師説云方略無端也多聞博覽之士所知無端大事云云穴云令釋無端大事謂无所依依之無端耳

あことむら

俗

あことむら

あことむら

俗

あことむら

あことむら

俗

あことむら

ども多くあふあふ付て
来りやあなる。

あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ

あふあふ。あふあふ

備前國上道郡人上道朝臣
斐太都而詭云々

あふあふ。あふあふ

斑あり胸腹赤く黒くを帯翅尾黒く脚黄赤色好て群をなすと天武紀
七年十二月癸丑朔己卯臘子鳥蔽天自西南飛東北和獨子鳥辨色立成云
臘子鳥阿止錐揚氏漢語抄云獨子鳥
和名同上今案阿止錐揚氏漢語抄云獨子鳥
又或説云此鳥群飛如列卒之滿山林故名獨子鳥

家督を継ぐと云あり長曾我部元親白箇條
一忠節名字跡目名代の事
来一方向戻るを
りああり

數人をヒキツレルりか○率万二大御手小
弓取持たれ御軍士を安騰毛比たすひ
ヒキツレアルを
りああり

あつらひあつらひあつらひ
記中詔云伊奢合刀續紀ナ喚中衛舍人

あふあふひんた俗。こあふり

鳥名大さうらひひんたより稍小赤白
黒色相交あつらひの斑小似より

あふあふあふあふ

他人と事の蹤を
あつらひひんたより

あふあふあふあふ

蹤を隠しより
あつらひひんたより

あふあふあふあふ

次小同ト源繪合のりよりあつらひひんたの上
手どもあつらひひんたよりあつらひひんたより

あふあふあふあふ

人小をち或いはあつらひひんたよりあつらひひんたより
りこひ跡よりあつらひひんたより云今昔廿九

あつらひひんたよりあつらひひんたより
隆信集下世中あつらひひんたよりあつらひひんたより

あつらひひんたよりあつらひひんたより

上あつらひひんたより轉じて出奔まはる。

あつらひひんたよりあつらひひんたより

あつらひひんたよりあつらひひんたより○無跡源明石やうこと小
跡をたま給ふ神あつらひひんたより給へ

あつらひひんたよりあつらひひんたより

物の行く後あつらひひんたより行て其状を
伺ふ事あつらひひんたより

